

①の対比の観点は「大きさ」。②は「軟らかさ（硬さ）」。③は観点がずれています。そのため対比が成立していません。④は、「大きい・小さい」という反対語により、一つの対比は成立しています。が、もう一つの対比である「軟らかい・硬い」の観点が後半だけ消えています。そのため、バランスの悪い文章となっています。後半を、「それに対して、あのボールは小さくて硬い」とすることに、バランスのとれた対比の文章となります。対比関係の整理とは、このように、発信・受信の際、「観点」と「バランス」に意識を向けていくことを意味します（鉄則7参照）。

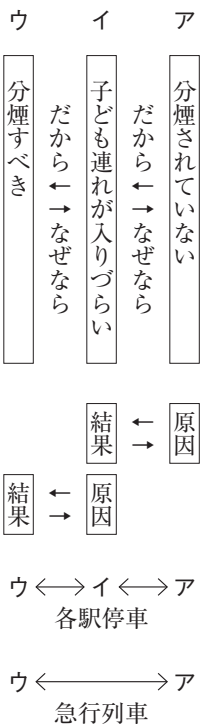
なお、対比はいつも「正反対」である必要はありません。「冷たい」の正反対は「熱い」ですが、「ぬるい」でもよいわけです。ただし、次の②のようなタイプは注意しなければなりません。

- ①「日本はもう朝だ。しかし、アメリカはまだ夜だ」
 ②「日本はもう朝だ。しかし、まだ空は暗い」

①は明確に対比になっていますが、②は対比とは言いがたい文です。この本では、②のようなタイプ（後半が前半に対して「予想外の展開」になるようなタイプ）を「逆接」とし、「対比」とは区別しています。記述答案を作成する際には、意識的に①のような対比の文を作れるようにすることが大切です。

たどる力——因果関係整理力

因果関係とは、原因と結果の関係のことです。



「因果関係が成立する」とは、「なるほどと思える」ということです。一〇人中八人が「なるほど」と思えるかどうか（すなわち、客観性が高いかどうか）。これが、正しい因果関係の一つの基準になります。読解問題では、多くの場合、ウが問われます。「ウはなぜか」。その答えは、多くの場合、ア↓イとなります。すなわち、「アのため、イであると言えるから」「アによって、イとなったから」などと答えるわけです。このとき肝心なのは、「イ」です。イが抜けないようにする（＝各駅停車にする）のがポイントです（鉄則19参照）。ただし、会話などでは、あえて急行列車を選択することがあります。右の分煙の例で、店員が店長に主張する場面なら、イを抜かしても話を通じるはずですが。この「駅」は店員と店長の間では暗黙の「常識」だからです。発信者と受信者の間に共有された「常識」は、むしろジャン